

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	東北大学	拠点番号	D02
申請分野	人文科学		
拠点のプログラム名称 (英訳名)	言語・認知総合科学戦略研究教育拠点 A Strategic Research and Education Center for an Integrated Approach to Language and Cognition		
研究分野及びキーワード	<研究分野: 言語科学> (句構造文法)(意味形式)(脳の言語野)(失語症)(ロボットへの言語機能実装)		
専攻等名	国際文化研究科(国際文化交流論専攻、国際文化言語論専攻)、情報科学研究科(人間社会情報科学専攻、応用情報科学専攻)、工学研究科電気・通信工学専攻、未来科学技術共同研究センター、医学系研究科障害科学専攻、文学研究科言語科学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 堀江 薫 教授 他 19名		

拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成16年1月現在)を抜粋

<p><本拠点がカバーする学問分野について></p>	<p>言語学(生成文法、認知・機能言語学、言語類型論)を中核にし、脳機能イメージング学、高次機能障害学、認知心理学、音声言語処理工学など言語科学関連分野を包含した研究者集団による広範な学際的拠点を形成している。</p>
<p><本拠点の特色及びその目的等></p>	<p>本研究教育拠点では、で述べた本学の言語関連科学研究者らによる学際的な言語・認知総合科学研究教育拠点を形成し、脳機能学で得られた知見を言語学モデルへフィードバックすることによる理論の再構築という新しい言語・認知科学体系の創成を構想している。本拠点形成の目的は、これまでの共同研究の実績の上に、(1)文理融合型学際的研究拠点を形成すること、(2)言語学を脳内言語野の観測データを基にした実証的な理論科学体系に仕上げること、(3)本拠点を実証科学としての言語科学の国際的な研究発信拠点とすること、である。言語・認知という人間存在の基盤の明確化、「人間把握の言語科学」体系の構築、およびその構築に不可欠な「脳の発達とそれに伴う言語の獲得と運用、喪失過程の総合的解明」は、人間と自然の全体的理解を目指す科学一般から要請される重要かつ緊急の今日的課題であり、社会的要請も大きい。</p>
<p><COEを目指すユニーク性></p>	<p>本研究教育拠点では、文系の言語学研究者の言語理論・モデルを、理系の脳機能イメージング学、高次機能障害学、認知心理学、音声言語処理工学などの言語関連諸科学研究者が実験によって実証し、その結果をさらに言語理論・モデルにフィードバックするという文理融合の言語認知科学拠点を単独で形成している点で世界的にも極めてユニークである。類似研究機関として米国のSalk Institute、ドイツのマックスプランク神経科学研究所、本邦の理化学研究所などがあるが、いずれも理系の研究者中心で、文系の言語学研究者は主導的な役割を果たしていない。</p>
<p><本拠点のCOEとしての重要性・発展性></p>	<p>(1)fMRI等を用いた非侵襲的脳内観測装置等による脳言語データと言語理論との対応を探ること、および(2)言語現象の多様性とそこに潜む規則性の理論言語学的考察を進めること、の2点を並行的に推進することによって、言語の脳内表象の分析と言語理論の構築とを双方向的に行うことができることは、「言語・認知総合科学」の創成に不可欠かつ重要である。具体的な研究の成果としては、多言語使用者の脳活動の仕組みを明らかにすることによって言語習得理論、外国語教育への応用の発展性を含んでおり、グローバル化の急速に進む今日、言語習得の仕組みの解明は緊急の課題である。</p>
<p><本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果></p>	<p>本プログラム終了時には、文理融合型の実証的科学の一分野として「言語・認知総合科学」の創成が実現する。脳と言語・認知の研究は世界的に見てこれからの課題であり、本拠点は先駆的研究活動の世界的な水準を維持しながら、博士課程学生の育成に貢献することが期待され、学内的な支援も受ける予定である。教育面では、脳内観察に基づく外国人の日本語習得、日本人の外国語習得過程の解明によって、外国語の効果的学習法・教授法への重要な提言が可能となる。</p>
<p><背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等></p>	<p>言語・認知の脳科学研究については、特に生成文法理論の観点から米国MITなどで試みられているが、本拠点ではこれらの拠点と異なり、特定の言語理論に偏重することなく言語の多様性・類型論的変異に十分注意を払った形で、言語の脳内表象の普遍性および外国語習得過程の解明、外国語教育への脳科学の応用を行っている。</p>

機 関 名	東北大学	拠点番号	D 0 2
拠点のプログラム名称	言語・認知総合科学戦略研究教育拠点		

21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初目的を達成するには、下記のコメントに留意し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

本プログラムは言語学、脳科学、認知科学、ロボット工学の学際的総合的な研究拠点を形成するものであり、COEプログラムにふさわしいと言えよう。事業推進担当者にも優れた人材を擁して、適切な共同研究体制のもとに着実な成果をあげてきている。若手研究者の人材育成についても、十分な配慮がなされている。また、自主的に外部評価を取り入れている点も評価できる。

しかし、本プログラムの内容は、言語をめぐる脳科学・認知科学に重点がおかれ、人間の言語活動全般への配慮が乏しい。言語に対する脳科学や認知科学研究は、たしかに現在もっとも活発に研究が行われている領域であり、成果が「見えやすい」には違いないが、そもそも本プログラムが「人文科学」領域のプログラムとして採択されていることは十分留意されるべきである。そのためには、人間の言語・コミュニケーション活動全体を幅広くとらえる研究、あるいは発達の・臨床的研究を取り入れるなど、人文科学的観点を一層重視されることが望まれる。